

## 降臨節第三主日（12月18日の聖書箇所）

### I 第一朗読（イザヤ7章10―17節）

- 10 主は更にアハズに向かつて言われた。11 「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」
- 12 しかし、アハズは言った。  
「わたしは求めない。  
主を試すようなことはしない。」
- 13 イザヤは言った。  
「ダビデの家よ聞け。  
あなたたちは人間に  
もどかしい思いをさせるだけでは足りず  
わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。」
- 14 それゆえ、わたしの主が御自ら  
あなたたちにするしを与えられる。  
見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み  
その名をインマヌエルと呼ぶ。
- 15 災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで  
彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする。
- 16 その子が災いを退け、幸いを選ぶことを知る前に、あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる。17 主は、あなたとあなたの民と父祖の家の上に、エフライムがユダから分かれて以来、臨んだことのないような日々を臨ませる。アッシリアの王がそれだ。」

#### 言葉の解説

■イザヤ書7章は紀元前七三三年の「シリアエフライム戦争」の際、南ユダ王国のアハズ王に語りかけたイザヤの言葉を伝えている。この戦争は、パレスチナ支配を目論むアッシリアに対抗して反アッシリア連合を組んだシリア（アラム）とエフライム（北イスラエル）とが、連合に参加しようとしたアハズに対して起こした戦争。

10節 ■「アハズ」。二十歳で王となり、即位のすぐ後にこの事件が起こっている。

11節 ■「深く陰府の方に」。ここでの「陰府」はエジプト、あるいはアッシリアに代表される人間的な力の象徴だろうか。■「高く天の方に」。神を表しており、具体的には、エジプトに組することも、アッシリアの援助にも頼らず、神に信頼してエルサレムを守ることを指すかもしれない。アハズは人の力を取るか、神を取るか、選択を迫られている。

12節 ■「主を試すようなことをしない」。若い王は神に信頼することはできないが、かといって人に頼ると言い切る大胆さも持ち合わせていない。外国の援助に頼らず、神に信頼してエルサレムを守ろうとして敗れたなら、神に恥をかかせることになる、それは主を試みることであり、それはできない、と王は考える。こうして、アッシリアに援助を求め、その後、アッシリアに隷属することになった。

14節 ■「わたしの主が御自ら」。神はしるしの授与を断わられても、自分のほうから与える。■「おとめが…」。ここで「おとめ」と訳されたヘブライ語アルマーは、「既婚の若い女性」をも表せるかもしれない。それがここでの意味であれば、ここでの「しるし」は処女降誕ではなく、「インマヌエル」という珍しい名前にある。

①今日の朗読は、アハズと主なる神、あるいはイザヤとの対話になっているが、この会話の真意を理解するためには、時代背景を思い起すことが不可欠である。アハズとは前七三二年ごろに二十歳で即位した南ユダ王国の王だが、即位二年後の前七三三年に舵取りの難しい事件に遭遇してしまう。というのは、北イスラエルの王ベカとアラム（シリア）の王レツインが手を組み、エルサレムを攻撃しようとしたからだ。彼らの目的は、反アッシリア連合への参加を拒んでいた南王国を仲間に取り入れるために、アハズを退位させ、傀儡政権を作ることにあつた。

ペリシテの都市国家群もこの連合に参加していたから、ユーフラテス川以南の国々では南王国だけが独自の行動をとっていたと思われる。このような連合が必要とされたのは、前七四四年にアッシリア王となったティグラトピレセル三世が国力の回復に成功し、ユーフラテス川を越えて、エジプトを視野に置いた拡張政策をとり始め、その後の王たちもこの政策を継承したからである。ペカヤレツインは、アッシリアのこのような動きに対抗するために、連合を組んだのである。彼らの背後にはエジプトの存在があったと思われる。

今日の朗読に「あなたたちは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、わたしの神にも、もどかしいお思いをさせるのか」とあるが、国民の抱いたもどかしさはさまざまであったにせよ、神のもどかしさは反アッシリア陣営に参加しなかったことへの不満でもなければ、逆に即座にアッシリアにたのんで安全を確保すべきだという苛立ちでもない。むしろ、エジプトに信頼してアッシリアに対抗しようとするのも、逆にアッシリアの配下となって安全を手に入れようとするのも、愚かなことだとイザヤは考えている。今日の朗読の直前に「信じなければ、あなたがたは確かにされない」とあるが、これを直訳すれば、「あなたがたは(信仰によって)自分を確かにしなければ、確かにされない」となる。神がアハズをもどかしく思うのは、アハズの心が揺れており、「信仰によって自分を確かにすること」が不十分だからである。そこで神は、今日の朗読の冒頭にあるように、「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に」と述べて、決断を迫る。ここでの「陰府」がエジプト、あるいはアッシリアを指すとすれば、「深く陰府のほうにしるしを求めよ」とは、エジプト、あるいはアッシリアの援助に信頼して安全を確保しようとする態度を表す。一方、「高く天のほうにしるしをもとめる」とは、エジプトにもアッシリアにも頼らず、神に信頼してエルサレムを防衛することを意味している。

アハズはそれに答えて「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」とあいまいな返事をしている。アハズは預言者への手前、エジプト、あるいはアッシリアに援助を求めるとは公言できないし、かといって神への信頼はいっそうむずかしい。そのような彼が言う「主を試す」とは、外国に頼らずに戦争に打って出て、神がほんとうに勝利を与えてくれるかどうか、試すということである。彼の心づもりは、アッシリアに援助を求めるよりほかにない、ということなのである。事実、彼はアッシリアに援軍を求め、アッシリアの神の祭壇をエルサレム神殿に置く羽目に陥っている。

断られても、神はあきらめずに、しるしを与える。いずれ気づくときが来ると信じているからだ。一人の若い女性から男の子が誕生し、「インマヌエル(神は私たちと共に)」と名づけられる。誕生そのものではなく、「神は私たちと共に」という旧約聖書にはこの箇所のみ登場する名前がしるしとなる。

## ②言葉の広がり(おとめ・アルマー)

この語は若い女性を表す言葉である。イサクの花婿を探しにアブラハムの故郷に向かった僕は、泉の傍らに行き、水を飲ませてくれた「おとめ」が神の望む花嫁だ、と心に決める(創二四43)。ファラオの王女はナイル河畔の葦の茂みに見つけた赤子モーセのために乳母を求めるが、そのときモーセの姉を「娘」と呼んでいる(出二8)。

これら二つの用例では、明らかに「未婚の若い女性・処女」を意味しているが、雅六8「王妃が六十人、側女が八十人、若い娘の数は知れない」では、王妃や側女と一緒に使われており、「既婚の若い女性」の可能性が高いと思われる。アルマーは「若い女性」を表す言葉であって、既婚であるか、未婚であるかは問われない、と見るべきだろう。

今日の朗読のアルマーを七十人訳は「処女」を表すギリシア語に翻訳した(マタ一23はこの七十人訳からの引用)。しかし、イザヤ自身が「処女」を考えていたかどうか疑問と言わざるを得ない。旧約聖書が「メシア」を表すとき、母がどのような女性であるかには興味を持っていないからだ。

Ⅱ第二朗読 (ローマの信徒への手紙1章1-7節)

ローマの信徒への手紙 1章1-7節

1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、  
 2 この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、3 御子に関するもの  
 によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。5 わ  
 たしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵  
 みを受けて使徒とされました。6 この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召さ  
 れたあなたがたもいるのです。——7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一  
 同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるよう  
 に。

言葉の解説

- 1 節 ■ 「選び出され」。この動詞アフォリゾー（分ける）は七十人訳（ギリシア語訳旧約聖書）では、人間や動物の初子や初物を神にささげることを表す。また、イスラエルを代表して神に仕えるレビ人を聖別することや、神がイスラエルを他の国々から取り分けて神の特別な所有とすることを表すのに用いられる。ここでは、パウロが将来の任務のために神に聖別されたことを指している。■ 「召されて」。動詞カレオー（呼ぶ）の派生語クレートス。パウロはこの語を用いて、彼は神の招きによって使徒とされたことを表す。さらに彼はローマの信徒を「召された」者と呼び（6-7節）、互いに共通する体験を確認している。
- 2 節 ■ 「この福音は…聖書の中で…約束された」。神の福音は旧約聖書に約束されている。とすれば、旧約聖書は福音との関わりにおいて正しく理解されることになる。
- 3 節 ■ 「肉によれば」。9と5と同様に、「一人の人間としては」あるいは「キリストの肉体的な面に関するかぎり」を意味する。このように限定したのは、「ダビデの子孫から生まれた」という事実がキリストについての真理全体を言い尽くすものではないと主張するため。
- 4 節 ■ 「わたしたちの主イエス・キリスト」。「わたしたちが身を委ね従うべき…」といった意味だろう。
- 5 節 ■ 「信仰による従順」。直訳は「信仰の従順」。解釈が分かれるが、パウロにとって神への信仰と従順は同義であると言えるので、「信仰の中に存在する従順」の意味だろう。
- 7 節 ■ 「恵みと平和」。「恵み」は神が無償で与える愛と憐れみであり、「平和」は神の恵みがもたらすすべてのよいものを表す。

①今日の朗読は手紙の挨拶の部分だが、すでにパウロを知っている人々に宛てた他の手紙と比較すると、少し長い文章になっている。彼はここで、一面識もないローマの信徒に自分は何者であるかを理解してもらおうとしている。パウロが自分自身をどのように理解し、自分の伝える福音はどのような福音であり、また自分が果たすべき使命は何であるかを述べているのである。パウロは自分自身を「召されて」使徒となった者と紹介し（1節）、ローマの信徒も「召されて」聖なる者となった人々だと呼んでいる（6-7節）。「召された（呼ばれた）」という語を自分とローマの信徒に用いたのは、まだ会ったことのない両者をつなぐ共通の経験は、神から「呼ばれた」ということだからである。この事実を訴えて、パウロは互いに仲間であるという意識を強めようとしている。

パウロは「召された使徒」として自分を示すことによって、復活のキリスト自身からこの任務を受けたという事実注目させる。それは同時に、パウロが「使徒」であることの背後には復活のキリストが現存することを示すことになる。その意味で、「使徒」という語はここではパウロの謙遜を表すと同時に、神から来る最も威厳ある権威を表している。しかも、パウロはガラ1-15に述べるように、「母の胎内にあるときから選び分け」られており、神の福音のために

働く者として聖別されていた。この事実をここでは「神の福音のために選び出された」と述べている。さらに、パウロは自分のことをキリスト・イエスの「僕」だと言う。「僕」という語は旧約聖書では、神との関わりに生きる人を表す。「主の僕」という称号は、モーセ、ヨシユア、ダビデ、さらに預言者たちに与えられた榮譽ある称号だが、パウロにとっては、自分も含め、キリストに呼ばれた者はすべて「キリストの僕」なのである。

このようなパウロが伝える「神の福音」が2―4節に示されている。「神の福音」は、神自身が預言者を通して旧約聖書の中で前もって約束していたものだから、確かな福音である。神の福音は「御子」についての約束であり、「御子」によって実現された。

御子は「ダビデの子孫から」生まれた。しかし、ダビデの家から生まれたからイエスはメシアなのではない。マタイが伝える系図によれば、マリアの夫ヨセフがダビデの子孫であり、そのヨセフの家に入れられることによってイエスは「ダビデの子孫」とされた(マタ16)。この系図が示すように、メシアであるイエスがダビデの家に入ることによって、ダビデの家からメシアが生まれるという神の約束は実現し、その確かさが確証されたのである。

パウロはここで「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれた」と述べることによって、御子が完全な人間性を備えていることを表している。そして完全な人間である御子は、人間の限界を超える死者からの復活を経験した。復活とは人間の理解を超える出来事だから、それは「聖なる霊による」出来事である。私たちが御子イエスを復活の主と知ることができるのは、聖霊が私たちに働くときだけである。そのような信仰は「従順」と言い換えることのできるものである。パウロは御子イエスが復活の主であることを告げ知らせる。それは、同時に、すべての異邦人を「信仰という従順」へと導く宣教でもある。パウロは恵みとして与えられたこの使徒としての務めを果たすために、何としてもローマを訪ねようと考えている。

## ②言葉の広がり(使徒・アポストロス)

この語は古典ギリシア語では「遠征艦隊」や「司令官」を意味し、ユダヤ人によるギリシア語文献では、ヨセフスが一度だけおそらく「派遣」の意味で用いている。

新約聖書では、まず「使者、派遣代表、使節」の意味で用いられるが、この意味での用例は3例だけである。僕は主人にまさらず、「遣わされた者」は遣わした者にまさることはない(ヨハ13:16)。

次に、「神からの使い」を表す。神の知恵は預言者や「使徒たち」を遣わすと言い(ルカ11:49)、イエスは私たちが公に言い表している「使者」であり、大祭司である(ヘブ3:1)。

特に「使徒」と訳され、イエスに従って福音を告げ知らせる者を意味する。パウロや十二人を指すだけでなく(1コリ1:1、マタ12:2、ルカ22:14)、このような特定の人物以外にもこの語は用いられる。「使徒」にはイエスに選ばれた者という意味合いが含まれており、パウロはそれを「召された使徒」と述べる。この事実が異邦人宣教の使命を果たすための力をパウロに与えている。

Ⅲ福音 (マタイ1章18―25節)

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒にいる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切るうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れた。25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

言葉の解説

18節 ■「誕生」。直訳すると「起源」。1の「系図」は同じく「起源の書物」となる。マタイは福音書の冒頭とイエスの誕生を述べる今週の箇所「起源」という言葉を置いてイエスが誰であり、どこから来たのかを述べようとする。■「婚約」。当時のユダヤ人の慣習では、夫婦と認められるまでには二つの段階があった。第一に、証人を前にして結婚の意志と同意を表明する(マラ二14)。次に新郎が新婦を自分の家族の家に連れ帰る(マタ二五1―13)。「結婚」という言葉は第二段階に達した者に使われるのが普通だが、法的には第一段階の婚約ですでに結婚に入ったと見なされた。■「聖霊によって」。聖霊による誕生は、性的関係を伴わない清らかな誕生を述べるためというよりは、新しい命を生み出す神の創造的な働きを述べるためであろう。

19節 ■「正しい人」。「律法を遵守する人」、あるいは「苦しむ者への憐れみや親切な心を持つ人」の意味。ヨセフが「縁を切るうと決心した」こと、また「表ざたにすることを望まなかった」ことの根拠となる。■「ひそかに」。法廷に持ち込まずに、ただ離縁状を渡すだけで婚約を破棄しようとしたことを示す。

20節 ■「夢に」。この類の表現はマタイが描く「イエスの幼年物語」に五回も現れる(一20、二12・13・19・22)。神の指示が与えられていることを示している。

21節 ■「イエスと名付けなさい」。ヨセフが法的に幼子の父親であることを表明することであり、同時にヨセフの家系にその子を組み入れることを意味している。

23節 ■「おとめ」。このギリシア語パルテノスは「処女」の意味。

1章1節で「系図」と訳された同じ語(ゲネシス)が、今日の福音の冒頭で「誕生」と訳されている。これは「起こる・生じる」を意味する動詞から派生した名詞で、「起源・発生」を意味する。マタイは福音書の初めにこの語を置いて、イエスが誰であり、どこから来たのかを説明しようとしている。

婚約者マリアが身ごもったことを知ったヨセフは困惑する。彼はその懐妊が「聖霊による」ものであることを知らなかったからであろう。それで彼は表沙汰にすることなく、ひそかに婚約を解消しようとする。ヨセフがこのように決心した理由は、彼が「正しい人」であったからだとされている。神の律法に忠実に従って行動することも正しさであり、悩み苦しむ人を憐れみ助けようとすることも正しさである。この二つの「正しさ」の間で思い悩んだヨセフは、ついには「縁を切る」ことにするが、それを「ひそかに」行おうと決心する。決心を固めたヨセフに天使が夢の中で現れる。天使は、この出来事が聖霊によるものであるから、恐れずに彼女を受け入れるようにと諭す。さらに天使は、生まれる男の子はイエスと呼ばれること、そしてイエスが人々を罪から救うことを告げる。「イエス」という名は「神は救う」という意味であ

る。当時、この名前はありふれたものであった。しかし、天使の告知は、「聖霊によって」マリアから生まれる「イエス」が、単なる呼び名ではなく「神の救い」そのものであることを示している。

マリアの身の上に起きた出来事を解き明かすのは主の天使だけではない。マタイは、預言者イザヤの言葉を引用して天使の言葉を解釈している。しかし、21節と23節の言葉が全く重なっているわけではない。もともと明らかな違いは、その名前が「イエス」と「インマヌエル」となっていることである。これはイザヤの言葉と天使の言葉が食い違っているからではない。「神は救う」というイエスは、「神は我々と共におられる」というインマヌエルとしてこの世に来られ、私たちの間に生きておられる方です。また、その名前を呼ぶのは、21節ではヨセフですが、23節では原文のギリシア語の人称で「彼ら」となっている。ヨセフに告げられた救い主の名前は、「彼ら」、つまり私たちを含めた全世界の人々にも伝えられているのである。

眠りから覚めたヨセフは、天使の言葉に従ってマリアを受け入れる。彼が子に「イエス」と名付けることによって、聖霊によって生まれた子はダビデの血筋に入れられることになる。ダビデ家は神の選びのシンボルであり、そこからメシアが出ると言われてきた家である。ヨセフが主の天使の言葉に従ったことによって、救いが人々にもたらされた。

ヨセフが「正しい人」と呼ばれる理由はここにも現れている。律法に忠実であり、しかも苦しむ人に憐れみ深い人は、神の御心に素直に従おうとする人である。神の求める「正しさ」とは、神が起す出来事への忠実さである。神の言葉に従ったヨセフによって、救いの計画が開始される。神に対するヨセフの従順によって、私たちがイエスをインマヌエルと呼ぶことができる。

ヨセフに告げられた天使の言葉は、私たちにも向けられている。マタイ福音書の最後で、復活したイエスは「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(二八20)と約束する。マタイは、その福音をインマヌエルで始め、インマヌエルで終えている。「神の救い」であるイエスは、初めから終わりまで、いつも「私たちが共にいる」方なのである。

## ②言葉の広がり(天使・アングロス)

この語は基本的には「ある人物から他の人物に派遣された使者」を表す。洗礼者ヨハネはイエスが来るべき方であるかを尋ねさせるために「使い」を送っている(ルカ七24)。

しかし、多くの用例では「神と人間との間に位置する天的な被造物である天使」に使われる。悪魔の「手下」や墮落した「天使」にも使われるが(マタ二五41、2ペト二4)、ほとんどは神からの「天使」を表す。ヨセフの夢に現れた「主の天使」はマリアとの結婚(マタ一20)、エジプトへの避難(マタ二13)、エジプトからの帰国を告げる(マタ二19)。ルカ福音書では「主の天使ガブリエル」がザカリアに洗礼者ヨハネの誕生を告げ(ルカ一11)、マリアにイエスの誕生を告げる(ルカ一26)。

また、「天使」は荒れ野のイエスに仕え(マコ一13)、ゲツセマネでは祈るイエスを力づけ(ルカ二二43)、婦人たちに復活を知らせ(マタ二八2、5)、使徒たちの福音宣教を助けている(使五19、一一7、二七23)。

## 聖書における「義」

古代オリエント世界での「義」は、ただ法的な領域に限定される概念ではなく、倫理・政治・宗教・自然をも包含する中心概念である。義とは世界全体の基盤となる正しい秩序のことである。世界秩序である義は、神による創造から始まっており、人間がそれをわきまえないものではない。義は築かれ、維持されなければならない。義は築かれ、維持されなければならない。義は存在せしめるのはまず神である。神の支配は、詩編八九15が「義と裁きは御座の基」(直訳)と述べるように、義に基づいている。また、詩編一〇三6が「主はすべて虐げられている人のために義と裁きを行われる」(直訳)とあるように、神の救済行為の中心には義がある。「裁き」と「救い」は我々の常識では対立概念であるが、聖書における「裁き」と「救い」は神の義と深くかかわっている。神の裁きとは、義がもたらす秩序を妨害するものを除去することである。神は義の秩序を維持し、それを破壊する者を裁き、不当に苦しめられている者を救う。裁き救う神が特に配慮するのは弱者、孤児、困窮者である。それは詩編一四〇13が「わたしは知っています、主は必ず貧しい人(アニー)の訴えを取り上げ、乏しい人(エブヨン)のために裁きをしてくださることを」と述べていることに表されている。

旧約における王は神の代理者であり、神の義の仲介者であることを期待されていた。それは詩編七二が

1 神よ、あなたによる裁きを、王に  
あなたによる恵みの御業を、王の子に  
お授けください。

2 王が正しくあなたの民の訴えを取り上げ  
あなたの貧しい人々を裁きますように。

3 山々が民に平和をもたらし  
丘が恵みをもたらしますように。

4 王が民を、この貧しい人々を治め  
乏しい人の子らを救い

虐げる者を砕きますように。

5 王が太陽と共に永らえ  
月のある限り、代々に永らえますように。

6 王が牧場に降る雨となり  
地を潤す豊かな雨となりますように。

7 生涯、神に従う者として榮え  
月の失われるときまでも

豊かな平和に恵まれますように。

(省略)

14 不法に虐げる者から彼らの命を贖いますように。

王の目に彼らの血が貴いものとされますように。

15 王が命を得ますように。

彼にシエバの黄金がささげられますように。

彼のために人々が常に折り

絶え間なく彼を祝福しますように。

16 この地には、一面に麦が育ち

山々の頂にまで波打ち

その実りはレバノンのように豊かで

町には人が地の青草ほどにも茂りますように。

#### 17 王の名がとこしえに続き

太陽のある限り、その名が栄えますように。

国々の民は皆、彼によって祝福を受け

彼を幸いな人と呼びますように

と歌っていることから明らかである。ちなみに、1節の「恵みの御業」と訳された原語はツエダカー《義》である。この詩編の16—17節に歌われているように、聖書の「義」(世界全体の基盤となる正しい秩序)は自然界)にも関与している。

個人もまた共同体の中で義の状態を作り出し、それを阻害しないように求められている。しかし、義と認められる行為は我々の感覚とは異なっている。創世記38章が伝える物語に登場するタマルの行動は、我々の感覚では決して正しいとは言えないが、ユダはタマルの正しさを認めている。旧約聖書が求めている「義」は、必ずしも倫理的な視点からの正しさではない。求められているのは、規定を損なわず、秩序や関係を解消せずに、それらに寄与する適切な行動である。タマルがとった行動はこの意味で「義」なのである。しかし、時代が進むと、義は律法と深く結びれることになり、神の戒めを行うことが重視されることになった。

新約聖書の時代に近づくくと、セレウコス朝のユダヤ教迫害もあって、神に敬虔な者がまさに義のゆえに絶えず苦しみを受けるということが、例外ではなく、通常のことと思われるようになった。そこから終末思想、すなわち終わりの時に、神の決定的な介入(最後の審判)があり、義が再び打ち立てられるという期待が起こった。新約聖書に含まれるヨハネの黙示録はこのような思想に立って書かれている。例えば、黙示録6章9節以下に

9 小羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。10 彼らは大声でこう叫んだ。「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか。」11すると、その一人一人に、白い衣が与えられ、また、自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで、なお、しばらく静かに待つようにと告げられた。

とある。イエスもこのような状況の影響を受けている。義は阻害されており、再び打ち立てられねばならない。それは、貧者、困窮者に権利が与えられる神の王的支配(神の国)の到来によって現実となる。マタイにとって、義とは、イエスと同じように自分のすべてを神の意志のもとに置くことである。イエスにとって、義は神からの賜物であって、人間はこれを自らの力で行うことはできない。しかし、マタイはこの義を実践すべきものと理解した(マタイ5章8節・25章31—46節を参照)。



年代	エジプト	南ユダ王国	北イスラエル王国	シリア	アッシリア
前780		<u>アザルヤ=ウジヤ (787-736)</u> 周辺民族を討伐  農業の振興・経済的繁栄  アザルヤ、重い皮膚病に	<u>ヤロブアム2世 (787-747)</u> 「ハマテの入り口からアラバの海まで」  経済的繁栄、階級格差の拡大、対立  エロヒム資料	アッシリアの影響力 衰退	<u>シャルマネセル4世 (782-773)</u>  地方諸侯独立 国力一時衰退  <u>アッシュルダン3世 (772-755)</u> 国内で反乱。衰退続く。
前750年		<u>ヨタム (摂政、759-744)</u>  <u>アハズ (744-729)</u> ◇エドム、エイラトをユダから奪回	760 大地震 アモスの活躍 ◇暗殺, 王権交替相次ぐ <u>ゼカルヤ (747、6ヵ月)</u> <u>シャルム (747、1ヵ月)</u> <u>メナヘム (747-738)</u>		<u>アッシュルニラリ5世 (754-745)</u>  <u>ティグラトピレセル3世 (744-727)</u>
740		736 イザヤの召命 733 シリア・エフライム戦争 ◇アハズ、すすんでティグラトピレセルに服従、アッシリアの祭儀を導入 ◇アッシリアの属国としてのユダ	<u>メナヘム (747-738)</u> 738 アッシリア、パレスチナ遠征。メナヘム、ティグラトピレセル3世に朝貢 <u>ベカフヤ (737-736)</u> <u>ペカ (735-732)</u>	<u>ダマスコ王レツイン</u>	アッシリアを再興 738 シリア・パレスチナ遠征(イスラエルのメナヘムの朝貢を受ける)
730	◇エジプト、シリア及びパレスチナの反アッシリア運動を支援 【第22-25王朝】 <u>オソルコン4世(730-715、第22王朝)</u> <u>テフナクト(730-719、第24王朝)</u> <u>ピアンキ(751-716、第25王朝)</u> <u>ボッコリス(719-715、第24王朝)</u>	732 東ヨルダン、ガリラヤ、カルメル以南の海岸平野、アッシリアに併合 <u>ホシェア (731-723)</u> 731 ホシェア、アッシリアに屈服 724 ホシェア、エジプトと結び反乱 722 サマリヤ陥落(北王国の滅亡)	733 シリア・エフライム戦争 732 ダマスコ陥落 (シリア地方、アッシリアに併合, 住民を強制移住)	732 シリア、パレスチナ遠征(ダマスコを滅ぼし、イスラエルの一部を併合) 728-727 バビロニアを征服(ブル)	
720	<u>ジャバカ (716-701)</u> 全エジプトを統一 パレスチナの反アッシリア運動を支援	<u>ヒゼキヤ (728-700)</u>  713-711 ヒゼキヤ、アシュドトを中心とする反アッシリア連合に参加 712 ヒゼキヤ、サルゴンに屈服、朝貢 ◇ヒゼキヤ、バビロンのメロダクバラダンと結び再度反乱を準備 ◇シロアの水路を建設(シロア碑文) 704 ヒゼキヤ、アッシリアへの反乱主導 ◇国内で祭儀改革、異教的要素の排除 701 セナケリブにエルサレムを攻囲され、ヒゼキヤは屈服し、セナケリブに朝貢	(指導者層を強制移住させ、異民族をサマリヤに植民。宗教混濁的祭儀の発展)	724 イスラエル遠征 722 サマリヤを滅ぼす 721 メロダクバラダン2世反乱によりバビロニアを独立	
710	<u>シャバタカ (701-690)</u>			サルゴン2世(721-705) 713 シリア、パレスチナに遠征し反乱を鎮圧 709 サルゴン、バビロニアを再征服 <u>セナケリブ(704-681)</u> ニネヴェに遷都	
700					701 ユダヤへ遠征し反乱を鎮圧